



工房に通い作品を制作する日々

さらに人生

ステンドグラスの 光と色に 魅せられて

東 孝昭さん(67歳)



さらに人生

「ステンドグラスは透過する光の色を見るものです」

「ステンドグラスは、とても簡単にいうと、何枚にもカットされたガラスに絵を描き、それを炉で何度も焼いて色を定着させ、そのガラスを鉛の線で組み立てたものなんです」

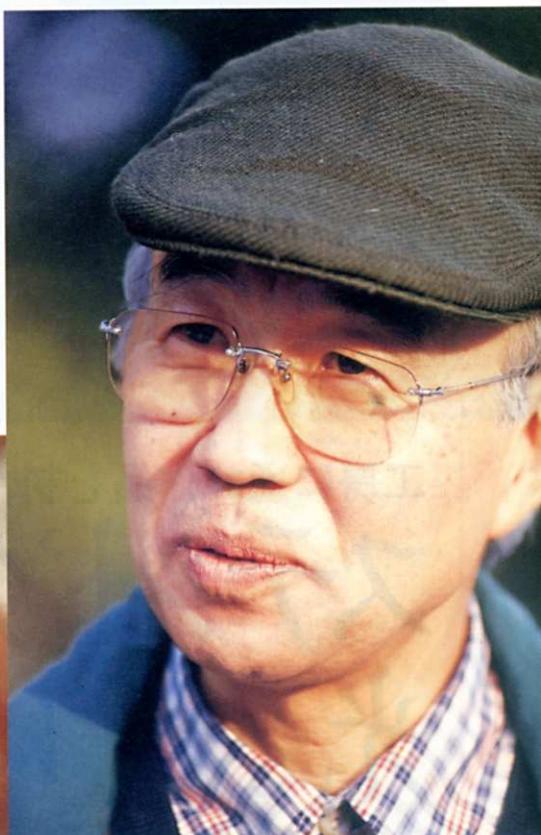
こう説明してくださるのは、東京・吉祥寺にあるステンドグラスの制作工房でお会いした東孝昭さん（67歳）。東さんの現役時代は商社マン、2度のパリ駐在体験がある方です。

今は毎週水曜日の午後、川崎の自宅から工房にやってきて、夕方までの時間を自分の作品作りに費やしています。

ステンドグラスという言葉は誰もが知っていますが、実物はヨーロッパの宗教建築と緊密な関係にあるせいか、なかなか馴染みのあるものではありません。私もこんなに近くで、じっくりと見るのは初めての経験でした。そして、しばらく見ていると、気づいてきました。ある色彩、たとえば、からし色が光の変化によって、もつと明るい黄色になっていくのです。その色彩は一定ではなく、目の前で常に変化しているのでした。

「同じ平面画でも、絵画は反射光で色を

「ステンドグラスの制作は、紙にデッサンを描くところから始まります。その絵をどうカットするか決め、ハサミで切って型紙を作つていきます」。ステンドグラスの作り方を楽しそうに説明する東孝昭さん。



ステンドグラスは透過する光の色を見ることになる。白く塗った部分や明るい部分は光を通しやすく、色を重ねて塗っていくと、光は通りづらくなり暗い感じになっていく。

見ますが、ステンドグラスの場合は透過する光の色を見るものなんです。ですから、外からの光の変化によって色彩は変わつてきます」

その言葉を聞きながら東さんの作品を見ていくと、だんだんステンドグラス作りの魅力がわかつてきました。

自分の内面にあるものを表した絵と、外界から透過してくる光をいかに美しく出会わせるかがステンドグラス作りの楽しさではないのか。

と思ったわけですが、それにしても近くでみるステンドグラスは、やはりヨーロッパ的な質感のあるものでした。合わせると約13年になるヨーロッパの生活の中で、東さんは何を経験してきたのでしょうか。

それが今のステンドグラス作りと、どう関係しているのか、ちょっとお話を聞いてみたくなりました。

「ハッピーリタイア」をするフランス人たちとの出会い

東さんが和歌山大学を卒業して東洋綿花株式会社（現在の株式会社トーメン）に入社したのは昭和32年。

「その年に新たに設けられた化学品部に配属されました。学生時代には一番の苦

17世紀の屏風絵「豊國大明神臨時祭礼図」をモチーフにして描かれた作品。



ピカソの若い頃の作品「若い農夫」をモチーフにしたステンドグラス（すべて東さんの作品）。



16世紀のイタリアの画家イッティアーノの「賢明の寓意」をモチーフにした作品。

手だった化学ですよ（笑）。そうしたら7年後には、やはり苦手だったフランス語を話す国に転勤を命ぜられたんですね」昭和39年、パリ支店の欧州化学品部で働くことになったのでした。

「化学品といえば石油化学製品があります。日本も増産した時代です。しかし国内では需要が供給を後追いしている状況でした。原材料費を中東に、製品作りのライセンス料をアメリカに、それぞれかなりの額を払いましたが国内では売れず、結局はダンピング輸出という結果になる。そんな国の商社マンとして私は世界に出て働いていたのですね」

パリでの仕事は5年間。しかし、その期間、日本経済の発展は目を見張るような勢いでした。

「私が帰国しようとした年、日本のあるメーカーの小型車がフランスで売り出されることがなったんです。小さな車です。しかし、それにパリジエンヌが乗つてシヤンゼリゼあたりを走っていると絵にならんですよ。その光景は今でも忘れられません。ああ、日本もやっと復興したと思って、とてもうれしかったです」

ダンピング輸出される石油化学製品から、パリジエンヌがお洒落に乗る小型車までの変化。この経済成長には、当然そ

れを支えてきた人々がいます。「あの時代を経験した方々はよくわかると思いますが、日本人はまったく余裕がない、ただガムシャラに働いていましたね。私もそのひとりだったわけです」そんな東さんがフランスでカルチャー・ショックに陥ることに。定年を待たずして「ハッピーリタイア」するフランスの仕事仲間たちとの出会いでした。

「驚きました。彼らは一刻も早く仕事を辞めたいのです。体が健康なうちに自由になりたいからなんですね。日本人はそうじやない。定年で辞めるとき顔はにこやかにしていますが、心はまったくの正反対。私もその部類でしたから、ハッピーリタイアしようとするフランス人の気持ちがまったくわからなかつた（笑）。しかし、このときのショックは、私に大きな影響を与えました。仕事以外の世界があるということをわからせてくれたからです。この経験がなかつたら、今、ステンドグラスはやつていなかつたでしょう」とはいっても、帰国してしまえば、また必死に仕事をする日々が続きます。週末に「何か自分が好きなことでもしようか」という気になつたのは50歳を過ぎてからのこと。たまたま渋谷にステンドグラス教室を見つけて通い始めたのです。

筆は多くの種類がある。
描くだけでなく色をはがすためにも使う。



線や濃淡をグリザユ
という顔料で描く。



第1回目のパリ滞在時に撮影された写真。シャルトル大聖堂を訪れた若き東さん。この大聖堂は美しいステンドグラスがある教会としても知られている。



「ムツシユ・アヅマ、来てくれ、 何か意見をいってくれ」

この時期から東さんは仕事以外の世界でも積極的に生きる道を歩み始めました。それから昭和63年にフランスに再び行くことになりますが、パリでの暮らしは若いころとは違っていました。週末にはパリ市が主催している市民のためのステンドグラス教室に通い始めるのです。

フランスのステンドグラス教室は、日本とのそれとはかなり違ったといいます。「生徒の態度がまったく違います。とにかく意見ははつきりいう。おまえの作品のどこがよくないと面と向かっていってきます。日本の場合はお互いに批判はしませんね。ひとこといったら、いわれた方は辞めてしまうかもしれない（笑）。彼らは意見をいわれることがうれしいんですね。ですから制作中でも『ムツシユ・アヅマ、ちょっと来てくれ、何か意見をいってくれ』といつてきます。こういった中で生まれる作品は、アイデア豊富な魅力的なものです。彼らは日本人のように器用な人間ではありませんから、技術的な面では雑なところもある作品になります。しかし相互批判が日常的に行われるところからは、あつと驚くような作品

フランスのステンドグラス教室は、日本とのそれとはかなり違ったといいます。

「生徒の態度がまったく違います。とにかく意見ははつきりいう。おまえの作品のどこがよくないと面と向かっていってきます。日本の場合はお互いに批判はしませんね。ひとこといったら、いわれた

方は辞めてしまうかもしれない（笑）。彼らは意見をいわれることがうれしいんですね。ですから制作中でも『ムツシユ・アヅマ、ちょっと来てくれ、何か意見をいってくれ』といつてきます。こういつ

た中で生まれる作品は、アイデア豊富な魅力的なものです。彼らは日本人のよう

に器用な人間ではありませんから、技術的な面では雑なところもある作品になります。しかし相互批判が日常的に行われ

るところからは、あつと驚くような作品

あのカルチャーショックがなかったら
今の生活はなかったような気がします。



今野満利子先生(右から2人目)のアトリエにて

が生まれることがあるんですよ」

こうした話を、東さんは過度にフランスをほめたたえるのではなく、また日本を卑下することもなく、たんたんと語っています。話の一部だけを引用すると、どちらかのニュアンスの話になりますが、全体として聞いていると、フランスも日本も人というのは、その文化から脱することができずに面白いものだね、といった調子でしようか。

ここで思ったのは、どうして東さんがステンドグラス作りを始めたのかということです。取材中、東さんに質問しましたが「色物好きだから」と笑い話でごまかされてしましました。そこで私が想像したことを書いておきましょう。

日本が世界に大きく窓を開けようとしでもなかなかそれができなかつた時代に、世界へ出かけていった東さんは、日本の外界と内側の世界を繋ぐ仕事をしてきました。そのように生きてきた人だからこそ、自分の内面にあるものを表した絵と、外界から透過してくる光を、いかに美しく出会わせるかが大きな課題となるステンドグラス作りに魅了されたのでは。

フランス人と日本人の違いを、軽妙に話す東さんを見ながら、私はそう思つたのでした。